

## 週刊 座、グレート・リーダーズ通信

## 『インド私録-思い切り取り組んだこの 50 年-』 No.20

## 今週のキーワード！ 貧困

## やはり「貧」は「困」ではないのか

今月 14 日、都内御茶ノ水で、インド人旅行会社社長による講演が行われ、「インドには『貧』はあっても『困』はない」と語ったという記事が翌日付けの財経新聞に掲載されました。わたしたちインド総研もこの話題をネット・ラジオ「モーニング・ニュームンバイ」と Twitter でご紹介しました。なんとといっても、「『貧』はあっても『困』はない」というキャッチには惹きつけられます。日本人の心のどこかにある「貧しくても心豊かに暮らす」という清貧の考え方に、このフレーズは実にストーンと腑に落ちるのです。

講演の内容を伝えた記事によれば、「『貧』はあっても『困』はない」の心は、「インド人には『今の人生は生まれ変わりの結果』という考え方があり、それを受け入れている」というところにあり、それが、「インド人が貧しくとも力強く生活していける秘訣である」(財経新聞)と書かれていました。

「座、グレート・リーダーズ」をお聞きの皆様はここできくと、第 20 回の放送で武藤氏が語ったことを思い出されたかと思います。路上で生活している人々のこと

は「あれはあれだよ。そんなことを気にしていたら、君、インドではやっていけないよ」と武藤氏に忠告したというインドの友人の言葉を。

『インド私録』には、武藤氏がインド北部に出張した際、貧しさのあまり自分の娘を 100 ルピーで売りに来る父親が登場します。これは今から 50 年も前のことですが、こうしたことは今でも起こっているのです。やはり、『貧』は『困』であり、「『困』はない」と語るところには、インド人が同国人の貧困を自分たちの問題として考えられないという問題が横たわっていることの証左といえます。武藤氏の語る、インドの「分断社会」の一面でしょう。

武藤氏曰く、「貧困層向けに物価の統制など、政府はいろいろな施策をしているが、インドが貧困問題を自分の問題として考えられるようにならないと難しい」。

これはまた、インドへ行けば外国人としてある種の分断社会に属することになる日本人が心に留めておくべきことでもあります。

## 「他人にやる水などない」

## ラジャスタンの砂漠で体験した貧困

武藤氏は 1950 年代後半のデリ

ー在任時の一時期、日本の広報活動の一環として、デリー近郊の農村を映写機と発電機を積んだジープで回る事業に携わっていました。これは、夜ともなると真っ暗闇に閉ざされる農村で、屋外スクリーンを設営し、日本を紹介する映画を上映するというもので、目的は良好な日印関係の醸成といったものでしたが、当時からインドでは日本はトランジスタラジオなどで勇名を馳せており、対日感情もよく、さらにまた娯楽のない農村のこと、物珍しさも手伝ってどこでも大盛況だったとのこと。

そのときのエピソードの一部が、前述の父娘や、第 20 回放送でご紹介したウツタル・プラデシュ州の貧村での白米と黒砂糖と水での歓待でした。どちらも武藤氏を遣る瀬ない思いにさせた事件ですが、実は時間の関係でお聞かせできなかったのが、ラジャスタンの砂漠をジープで目的地に向かっていった時の話です。水を切らして途中の小村で水を分けてもらおうとしたところ、「他人にやる水などない」とすげなく断られたそうです。この時ばかりは、貧困とともに水の有難さが身に沁みたとのことでした。

第 22 回放送  
10 月 26 日。



Hello,  
Goodbye ♪  
シン首相